

48【街の散策からの気づき発見】

節分祭・春日部八幡神社

会員 K.T.

2月3日(火)春日部八幡神社の節分祭を見に行った。節分祭は節分の日に神社や寺院で行われる行事である。3時過ぎ頃に着く。祭事の準備をしている氏子の人達、一般の人はまばらだ。「豆まきは、4時半ぐらいになりますよ。」と、常連らしい人から言われた。4時頃、一般参加者が集まってきた。本殿では祝詞奏上が始まった。祝詞奏上の終わり頃、一般参加者に「いり豆」が一握りずつ配られた。「もうすぐ、鬼がでてきますので、『鬼は外』で、豆を鬼に投げてください。」という。「鬼が通ります、本殿前の道を開けてください。」と、係の人が通り道をつくる。鬼たちが出てきた。こども達が「ワー、ワー」といって、豆を投げ、老若男女も笑顔で豆を投けている。鬼との豆まきのイベントが一頻り終わると、本殿前と本殿の左右に設営された舞台から「豆まき」が始まった。「豆まき」は、お菓子やカップ麺も投げている。『いつから、この様式になったのだろうか?』、と思う。文献によると、「節分」は、季節が変わる節目である立春・立夏・立秋・立冬の前日を指す言葉で、年に4回の節分があるものだ。いつしか時の経過の中で、旧暦の1年の始まりになる立春の前日が「節分」というようになった。「節分の豆まき」の起源は諸説ある



も、一般には、飛鳥時代(592年～710年)に中国から日本に伝わった「追儼(ついな)と呼ばれる儀式が起源といわれる。古代中国では、病気や災害、飢餓などの厄災を引き起こすのは鬼の仕業と考えられており、災いを引き起こす鬼を祓うための儀式が行われていた。この悪鬼を追い払い、災難を除く「追儼」の儀式が日本に伝わり、平安時代(794年～1184年)に、季節の変わり目が増加する疫病や災害を鬼に見立てて、追い払うための宮中行事として、「追儼」が行われるようになった。その儀式が由来となって、やがて庶民に広がり、現在に続く、「節分の豆まき」になった、という。春日部八幡神社の節分祭は、古からの節分の豆まきの由来を継承しながら、その長い歴史の中で、少しずつ変化しながら、今日の形があるのだろう、と思った。

もう一つ、由来はよくわからずに節分とのセットのようになっている『節分の夜、恵方巻を食べる習慣には、どのような由来があるのだろうか』、と思った。思えば、太巻きを丸かぶり食べる恵方巻の食べ方は、食べにくい、かなりユニークな習慣だ。調べると、諸説あるも、江戸時代に大阪で商売繁盛を祈願して太巻きを食べたのが始まりとなるらしい。その後、1930年(昭和5)海苔や寿司の商業組合が、節分に太巻きの丸かぶりのキャンペーンを実施し、80年代(昭和55年代)には、大手コンビニエンスストアが、それを「恵方巻」として販売したことで、全国的な風習となった、という。なにやらバレンタインのチョコレートと同じような販売戦略が由来のような感じだ。さて、節分に食べる恵方巻は、「恵方を向いて食べる」のが習わし、とされる。「恵方」とは、「明の方(あきのかた)」といわれる吉方向のこと。その年の福德をつかさどる「歳神様」がいる方向を指す。節分で恵方の方角を向いて恵方巻を食べると、その年の1年の邪気を払い、福を呼び寄せる、といわれる。「恵方」の方向とは、「東北東」・「西南西」・「南南東」・「北北西」の4方向のいずれかが恵方の方角と決まっている。余談ながら、「歳神様」がいる恵方の方角は、陰陽道の思想に基づき、十干(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)と十二支(子・丑・寅・卯・辰・巳・未・申・酉・戌・亥)の組み合わせで4方角が毎年決まる。西暦で簡便換算する方法もある。下1桁が[0, 5]の年は庚(かのえ)の恵方で方角は西南西、下1桁 [1, 3, 6, 8]の年は丙(ひのえ)の方角で南南東、下1桁 [2, 7]の年は壬(みづのえ)の方角で北北東、下1桁 [4, 9]の年は甲(きのえ)の方角で東北東、となる。ちなみに、2026年は、下1桁が“6”なので、恵方の方角は南南東、来年2027年は、下1桁が“7”なので、北北東となる。現在では、恵方巻を食べる時に方角を気にする人はいないのではないか、思う。伝統は不思議だ、「節分」を迎えると、『もうすぐ春がくる』、と思う。